

倫理研究所の創設者、丸山敏雄は「恩」について、次のように述べています。

恩は、自覚にねぎらった感謝の思慕であり、これを実践にあらわそうとすることである。おかげでこうなった、何とかお返しせずにはおられぬという心持である。

『実験倫理学大系』二七三頁

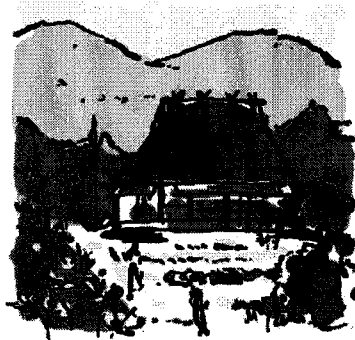
Aさんは兄と事業を営んでいました。しかし、数年後に兄が病気で他界し、Aさんが事業を継承することとなったのです。平凡な兄に対して、Aさんにはそのような力がなく、兄を慕っていた社員が、少しずつ離れていきました。Aさんなりに努力をしても、状況は変わりませんでした。そのような中、倫理法人会が主催する若手経営者セミナーに参加する機会を得ました。そこで、Aさんの心に重くのしかかる講師の言葉がありました。「両親に感謝できない人間が、社員やお客様に感謝することなどできない」というものです。さらに講師は、ある経営者が両親の足を洗う実践を通して、両親への感謝の気持ちを深め、事業を好転させた体験談を語ったのです。

亡き兄の姿を、ずっと追いかけてきたAさんは、創業者である父へ、思いを馳せたことがなかったことに気づきました。振り返ると、両親に親孝行らしいことをしたことがありませんでした。そこで、Aさんも両親の足を洗う実践に取り組みもうと意を決したのです。

Aさんは、まず母の足を洗いました。母は「なぜ足を洗

9月のテーマ | 親祖先への感謝

自分を育ててくれた両親の恩



「つてくれるの?」と聞いてきました。その問いに「自分は変わりたいんだ」と答えたAさん。母は息子の思いを受け止め「お兄ちゃんはお兄ちゃん、あなたはあなたでいいの」と、Aさんを一人の人間として尊重してくれました。その瞬間、Aさんは溢れる涙で何も見えなくなりました。

続いて父の足を洗いました。母とは違い、あまり話をしませんでした。ところが、父の足をじっと見つめていると、次第に父の半生が見えてきたのです。

三六五日、一日も休むことなく働き続けていた父。子供の頃、父が遊んでくれた記憶はありません。それでも寂しい思いをしたこともなく、むしろ休みなく働く父を誇りに思っていました。父は早朝から居間で、よく読書をしていました。どつしりと椅子に座り読書する父の姿は、威厳に満ちていたことを思い出したのです。

「自分は父のような男になりたかった。偉大な男になりたかったんだ」そう思った途端、頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けました。「自分は、この人の足元にも及んでいない」。Aさんには、敗北感しかありませんでした。そして、父のお陰で何の不自由もなく生きてこられたことに、Aさんは思い至ったのです。

Aさんは自分を遠くから見つめ、信じて見守ってくれていた両親に、感謝の念で胸がいっぱいになりました。その両親の思いに込められるべく、社員や取引先、お客様から、地域で一番「ありがとう」と言ってもらえる企業を目指し、真心込めて事業に邁進しています。